



高齢化する外国人のサポートの必要性

特定非営利活動法人 神戸定住外国人支援センター (KFC) の取り組みから

フフデルゲル
デイサービスセンターハナの会 管理者 呼和徳力根

日本在住外国人の高齢化および神戸の現状

日本における外国人登録者数は、2016年12月現在で238万人以上にのぼります。そのなかで、65歳以上の高齢者は、約16万人と全体の約6.7%に当たり、日本全体の高齢化率と比べ比較的少ない割合ではあるものの、75歳以上の高齢者も6万人以上で、介護の多文化化が課題になりつつあります。

2017年に開港150周年を迎える港町神戸は華僑、コリアン、インド人といった長い歴史を持つ在日外国人が多く暮らしています。また日本の難民受け入れ、国際化、戦後の政策に伴い在日ベトナム人や中国残留邦人帰国者など比較的在日歴の短いマイノリティコミュニティも多く存在しています。そのようなコミュニティにおいても高齢化が進んできています。

KFCの取り組み

KFCの高齢者支援は、1999年の在日コリアン食事会から始まり、2011年にはKFC帰国者新長田交流会、2013年からは在日ベトナム人高齢者支援パイロット事業が行われ、地域のニーズと共に広がってきました。現在は介護保険事業としてデイサービス、訪問介護、居宅介護支援、グループホーム、小規模多機能型居宅介護があり、利用者もコリアン、日本人、ベトナム人、中国残留邦人帰国者、華僑等がいます。そしてそれを支える職員も日本人、コリアン、ベトナム人、中国人、華僑、中国残留邦人帰国者、ペルー人、モンゴル族等多様な背景を持ちます。

そして神戸市からコミュニケーション・サポート事業の委託を受け、在日外国人などでコミュ



遠足で集合写真をとるのも楽しみの一つ

ニケーションが困難な被保険者の介護保険制度の理解や適切な利用の促進を支援するため、韓国・朝鮮語、中国語、ベトナム語での通訳派遣を行っています。以下にこれらの支援活動の実例を4つ紹介したいと思います。

事例A 文化の違い

中国残留邦人帰国者の自宅にてサービス担当者会議を行った時の出来事です。ケアマネージャーの一言：「Aさんは認知症がひどくなっています、訪問した時、お茶の葉っぱをそのままコップに入れて飲んでいたので。」とお茶の葉っぱをそのままコップに入れて飲む＝認知症とはどういうことかと私は思いました。日本ではお茶を淹れる際、茶葉を急須に入れますが、中国では、直接湯呑に入れます。そのことを知らない日本人のケアマネージャーは、中国残留邦人帰国者の自宅訪問をした際、いきなり湯呑に茶葉を入れたのを見て、認知症が進んだと勘違いしてしまいました。言葉の通じない外国人が、なぜ茶葉を直接湯呑に入れたのかを知るためには、通訳が必要なだけでなく、外国人高齢者の背景を把握して文化の違いによるものかどうかどう気づく支援者が必要です。この点については、介護関係者の方々に外国人高齢者や異文化に対する理解を深めてもらうための取り組みも行っていく必要があると考えています。

事例B 歴史的背景の違い

デイサービスセンターハナの会（ハナの会）にテレビ局が訪れた時の出来事です。90代の在日コリアンB氏が、ディレクターに話を聞いてほしいと以下の話をしました。「私は日本国籍を取って、孫たちも日本人として生きています。この番組に出たら、在日コリアンということがわかってしまい孫たちに迷惑になるかもしれませんので、名前と映像を控えてほしい」とのことでした。

B氏は2歳の時に来日され、戦時中に子ども時代を過ごし、行きたかった学校にも行けませんでした。戦後、



両親や兄弟7人、親戚は韓国に戻りましたが、B氏は夫と日本に残り、家を二度にわたり築き、震災を乗り越え、現在は年金生活で頑張っています。日本人に近づこうと頑張り、80歳を過ぎて国籍を変更しました。しかし、日本のデイサービスでは「堅苦しい、ご飯が合わない」と居場所を見つけることが難しく、現在ハナの会を利用されています。歴史の中で生じた本人の心の奥にある深い傷と向き合っていける力が私たちの介護現場では求められています。

事例C 認知症プラス言語の違い

C氏は元々統合失調症を患っており、現在は認知症にもなり、日本語の理解はある程度できますが、話している言葉はほとんど韓国語です。ハナの会に来た経緯は以下のとおりです。C氏が団地内を大きな声で韓国語を発しながら徘徊するなどトラブルを起こしており、地域住民から区役所に相談がありました。区役所の担当者がその相談を受け、介護の必要性を感じ、居宅介護支援事業所やデイサービス等につなげました。しかし、デイサービスでは他の利用者からいじめを受け、だんだんと利用拒否になり、やめることとなりました。C氏は地域の住民とトラブルが増え、栄養状態も悪くなり、認知症も進んできました。そこで、区役所の担当者が色々調べ、他区で距離が離れてはいるもののハナの会を利用したいと依頼に来られました。ハナの会では、韓国語対応ができるほか、長年培ってきた他文化対応能力のある利用者とスタッフがいます。ただ、依頼をうけたものの、支援は簡単なものではありません。玄関前で2時間ほどのやり取りがあり、朝のお迎えに3時間ほどかかることがほとんどでした。ハナの会に来た当初は不穏になることも多かったです。しかし、スタッフの努力等により、落ち着いて過ごされる日が多くなり、今では栄養状態も改善し、ハナの会で塗り絵などを楽しまれています。また、訪問介護部門と連携し、顔なじみの職員が自宅を訪問し、今まで実施が難しかった生活環境の改善も行うことができました。

事例D 非言語コミュニケーション

ベトナム人のD氏はアルツハイマー型認知症で、不安になった時に耳鳴りや「病院へ行きたい」等の訴えがすぐ出てきます。言葉の通じない看護師が血圧と体温を

測り、異常がない事を確認し、本人に説明しますが、完全には理解してもらえないのです。本人の訴えは続きますが、解決方法は気を紛らわせるしかありません。そこで私は、本人の得意な計算問題を用意し、一緒にしましょうというジェスチャーでゆっくり誘い、隣に座って問題を見せながら解いていきます。D氏は耳鳴りがしているから無理という表情をはじめは見せませんが、私が解いている計算の問題を見て頭では暗算を始め出します。そこでずっと鉛筆を差し出すとすんなり持って私に代わって計算していきます。D氏にゆっくり解いてもらい、その後本人に見せながら丁寧に答え合わせをし、調子が出てくるように導きます。一旦調子が出るとどんどん問題を解いていきます。

高齢化する外国人をサポートするためには

在日外国人高齢者支援は言葉や文化だけではなく、歴史的背景への理解や認知症など特定の疾患への対応能力が必要になります。また、C氏の例のように送迎車両やスタッフの手配をはじめ、他の利用者とのトラブルを最小限に抑える努力、栄養状態の改善、本人の楽しみを作る活動など多くの取り組みが必要となります。ポイントは、D氏の例のように、言葉だけではなく、一人一人に合った介護の在り方が求められます。これらを実施するためには多文化介護対応能力の高い人材が必要となります。多文化対応ができる介護専門職がいれば、言葉や文化がわからず混乱する現場や起こりうる地域トラブルの解決がスムーズにできると思います。全国で75歳以上の外国人高齢者が6万人以上いる日本の現状を考えると、その中でC氏のような日本語ができない認知症の方が一定数存在すると考えられます。介護の理念である「尊厳の維持」を達成するには外国人高齢者支援の積極的な取り組みが求められます。



現在トランプが大流行しています。言葉がわからなくても、認知症になっても、スタッフの支援があれば、利用者同士でやりとりできることが楽しいようです。